

患者を支える人々

①口の中の術後感染症など減らす

②話しながら痛みやつらさケア



歯科衛生士

奥井 沙織さん

近年、がん治療の前後に歯科衛生士が口腔ケアをする病院が増えている。

千葉県市川市の東京歯科大学市川総合病院歯科・口腔外科で、歯科衛生士として働く奥井沙織さん(27)は、昨年からは食道がんのチーム医療のメンバーになった。2年半余り、口腔がん(舌がん、歯肉がん、頬粘膜がんなど)を担当した経験を買わ

れた。

患者は治療方針が決まると、まず、歯科医師から虫歯や歯周病の治療を受ける。次に奥井さんが歯石除去や歯面研磨などの口腔清掃をする。手術や抗がん剤、放射線の治療を受けると、口の中の細菌による術後感染症や誤嚥性肺炎などが発症しやすくなるからだ。そのリスクを減らす。

それでも抵抗力の低下にともない、口内炎やカビの発生、口腔乾燥が起こる。とくに、口内炎は広範囲におよび痛みが強い。抗がん剤の場合は約4割の

患者の舌の縁や唇、ほおの内側の粘膜などに、放射線の場合はほぼ全員の患者で照射領域に生じる。

そこで奥井さんが徹底して副作用のケアに当たる。麻酔薬などの薬剤(ろがい薬)や、製氷器でアイスボールを作ってそれを食事中に口の中に入れて、痛みを緩和させる。そのとき、患者と話す時間を大切に。家族のことや日常に関する雑談だが、「患者さんは痛みや心のつらさをわかってくれる人を必要としているからです」。

市川市在住の作田みや子さん(60)は、2年半前に歯肉がんの治療で入院した。いまでも奥井さんのケアを受ける。「歯医者は緊張するので嫌いでし

た。でも、奥井さんの口腔清掃はとても気持ちよくなって安心できます。入院中は病室に来て下さることが心のやすらぎでした」

歯科衛生士を目指したのは「医療専門職は就職しやすいと思ったから」だが、がん患者の最期をみとるうちに、「意識が低下したら、何もできない」と無力感を抱いたことも。でも末期であっても、それぞれの状態に合わせてケアをすればいいと気づき、いまは、この仕事に自信を持っている。

(医療ジャーナリスト・福原麻希)

アスパラクラブのホームページに福原さんのコラムを掲載します

1982年生まれ。2003年歯科衛生士資格取得。同年から東京歯科大学市川総合病院歯科・口腔外科。2年

半余りの同大口腔がんセンター勤務を経て、09年から現職。